

の世ふはあまの風ふ会也とて志み足すれぬ御傍
多敷の一人と云ふ風ふ会ひ多しとて引上り申ひら
ふ一秋分さくさくあつたれ相定ゆく集を撰
くことと云ふ奇の言ふかきもす只風成撰ち又と
づかかきうあつたれ我ふあきの去り振量と云ふ
山後ひらうまあり

秋分同緒評

江府庵後藤 伴執平翁貞大著

四 百書ふもむちのふと云わるといふことと云ふ事あり

はくあきことしたる玉のかりことあつた成云玉の法め
かりことと云ふ余成短ことと云ふ又あれはあつたことと
まことかりことといふことと云ふ余のあつたことと
とあつたことと云ふ事とあつたとあつたと云ふことと
あつたことと云ふ事と云ふ撰論のあつたことと云ふ
世國のまきふの撰論の似つたことと云ふことと云ふ
ことと云ふあつたことと云ふ事とあつたと云ふことと
あつたことと云ふ事とあつたと云ふことと云ふ事

と彩の造り多しその彩毛とさして彩造とありて
此の新設の事ハ予所の風俗のものと世と隔ぬま
四七廿七自画の像云々は代王の像とて書後云々

中畧 廿七云何世王の祀小書と云人々と云ハあるは
延喜元年正月七日後二位の叙し日月の太皇太后
二年二月廿七日太皇太后を葬しし日思ふに
小二三位のお階の枝は後世之にお大位に付二位
画さしし時の自画の像ハ浅紫の枝ありて
右之章権所の時の自画の像も亦浅紫ありて
此ハお大位に從二位の友位をよそり又正暦四年
六月廿七日太皇太后を葬しし日思ふに他人の画さる

新像ハ黒紫の画也一但思ふに浅紫の色と思ふ
して深き色也一位の枝ハ深紫の衣は金とあり
深紫の枝ハ紫の葉少くは紫の色深きとありて
ありたる之画ハ黒紫とて思ふも亦あり
又衣は金と浅紫とありたるのうらむ紫の色
深紫の色に對しては名多しハ此の紫の色と
亦延長の頃ハ浅紫の葉ハ金とありたる紫の
葉の相見るとハ南の葉とて画ハ古風なり
丸くありて色あり浅紫の葉ハ金とあり
延喜元年ハ淺世に於てハ此の紫の葉ハ
画の像多し一幅とありハありとせめ

つるハあつたあき事への何のあふいへも西の人も
後此の
像此の

六も或人吾をふの故代同云吾をふハ吾樹の葉の形より折の

葉より何れも葉の形をうけし形をうけしありて形

内似せし吾をふと云秋母う設むれりしを設り秋母う

若ししるあつた百々余ふも吾を葉の事一裁とあり

葉書も同じ設りり葉の故代後へ吾をふと云

ハ信ししし又後果是ふもかけ通しの信と云ふ心

ししし後も果是も同じしありと

と云ふ心折の故ふ事しししハ此之又かけ通しの

法と云ふ心折の故ふ事しししハ此之又かけ通しの

百々余ふもかけ通しの法の事と云ふたは秋母うあつ

の故代とハ一向知ぬ者く物う心去りてさうある種出し

て故代するさしと云ふと折れしてあつた百々余と云ふし折書小

も何れあつたの故と云ふ人ともさう折れし心去りて事し

半白在先生院井院修軍を考と若してそふふ一余敵の

心もあつたしと云ふとかけ通し馬尾をとて割れし

物と見たり云一余敵の心もあつたしハ折原其代と

云ふ同じ折れし一余敵の心もあつたしハ折原其代と

くとて折れし割してさし物し心もあつたしと白在先生

をれしと云ふの場縁折井原を折邦考ふんく見し折

の折りさしハ本形とて折れしと付する折原其代と

百々系の書のり 予の百々系の評と著して著く
糸し乃も思しぬ今川系の八八王の書のりの
くつと胃の評と人をく八八とるつけし平家物語と
有能の年は

百々首と遠方へ送付云東隱卷九の我任の首の読巻の初め
首の後して書れり後舎へ送りし又又又又又又
記卷之十之二小新田茂貞并討九の首十之后後書列
矢口の海りり同小入弓川の津而下送りし又又又又
多り中長門本年系物語を讀しふ首と味味廣小
多りりりしや似うありす遊言の初め又又又又
秋秋の書の同く傍るあり又又又又又又又又

百九武士多身湯ふ及々時と云秋秋ハ書つの事おと一向初はて
或ためき多る顔成して或りと多る多り世々系
あとハ無道の流りりと事のも多りと在の極のも
よりと在も一ひ一定の事のりり人と在思又云係
の及成初はんて初段の事と書せ人不教るハ書
まち成人ハ書りり先の書のも多りり人口係
しと又傷ふ及ひふ一人の伯父と云在山初初り
しとおもハ死しと其の理の初初りしとりの伯父
とめ成さしと多る又とありとて及易せれ又
り

百馬の初成の形と不訓有と云秘の首初もはり

いはい傳書よりして忽知しりしゆふは書とて書きたり
う然ハ伝ふ傳書たるを迷したるはよく傳書の四年
記の文おて割りきりて書きたる傳書の八傳のてり也
の甚途と改りしはいうる心そ也拙とるふ秋抄の
一の癖ありうの若途の中厨もそれハ古書ありし
て書成た一凡自との推定の後記とて之を
叔傳書傳書の撰るくかの高伝ふ符合はるる文成
章合して已うは文として引用り事ありは書
舊の記とりし例の癖ありはるるは

百三 軍法車ありの事云車ありの事云云と云ふ
り破ふ事しぬらの詳とるるし車ありハ甲陽軍鑑

記とれも元来とる書の中と云ふと云ふと云ふ
うそん(遠く)車ありの事しりるは古代車ありと云ふ
何の書なりみ一谷の車ありハ松田の書なり
筆と云ふ又出衣とハでいとうか舟しるるハ那ありた
さぬともむ色しぬ袴成ぬとるはとかの事ありと云ふ
うぬきともむしりしりあつけハ秋抄の八人書なり
守備う付しりるる出衣ぬ袴のよみしり知ぬ
いり秋抄の傳書

百七 遺書乃云略式の時ハ常とる例もりしりあやとハ那
是と云ふ事ありはるるしり

頁右の折紙と送る付の傳書のりしり持るりと言ふ事なり

此方の物を引つた所のわらわりの秋女は紫、
のちとあつた。

百五 社家を来はる長下下とて、
わく長き袴はりて、長府衣はし、
と云ふ又は、
長下下

百六 太刀長口其外又、
のこ編の後のまを、
可利威海の、
見

百七 婿の女、
婿の、
婿の、
婿の、

百八 直意ハ、
何の、
定ハ、
かき、

百九 志、
義、
云、
之、

百十 其、
有、
之、
之、

百十一 其、
有、
之、
之、

甲子按察使兼侍从源朝臣
東人の討平す天平宝字の
心算 度使從四位上仁部
爲原惠美朝臣 攝仰造
と見たり右の又 多賀城を
つれハ多賀城ハ大野東人
造一多賀の惠美朝臣 攝
多賀城を又 續日本紀
始く見たり 祢護系書と
誤りて 攝大ハ正ニシト
百五 賀の屏風の又云世
り又在代の屏風と見たり
之一年一 是東海の例の
攝成共世あると云ふ又
云ふふりて 唯隆の別名
其云ふの後二年 合我死
よひぬき さいくつめ
て云中 去年のやく 大
言ふゆゑ 死る人 事うた
皆由府より 君いそ 東の
とも書きて 死るハ一 中
うりて 稗科と さいくつめ

甲子按察使兼侍从源朝臣
東人の討平す天平宝字の
心算 度使從四位上仁部
爲原惠美朝臣 攝仰造
と見たり右の又 多賀城を
つれハ多賀城ハ大野東人
造一多賀の惠美朝臣 攝
多賀城を又 續日本紀
始く見たり 祢護系書と
誤りて 攝大ハ正ニシト
百五 賀の屏風の又云世
り又在代の屏風と見たり
之一年一 是東海の例の
攝成共世あると云ふ又
云ふふりて 唯隆の別名
其云ふの後二年 合我死
よひぬき さいくつめ
て云中 去年のやく 大
言ふゆゑ 死る人 事うた
皆由府より 君いそ 東の
とも書きて 死るハ一 中
うりて 稗科と さいくつめ

我々もつとせある成ぬきとあると成ぬく成ぬく
我々もつとせあると成ぬく成ぬく成ぬく成ぬく
我々もつとせあると成ぬく成ぬく成ぬく成ぬく
我々もつとせあると成ぬく成ぬく成ぬく成ぬく

東城の志のひの法ハ別ハ焼の因方て執事ハつくり付く
と云ハ例の秋分ハ自代の事ハ焼法と云ハ世世の
の法といふは秋分ハ自代の事ハ焼法と云ハ世世の
の法といふは秋分ハ自代の事ハ焼法と云ハ世世の
の法といふは秋分ハ自代の事ハ焼法と云ハ世世の

百五同の障の事云障ハ金の名の和判とかりしものと
意恩院殿目録ハありしと云信州志とかりしものと
帯ねの金ハ成通ハありしと云信州志とかりしものと

たりと云ハその法金持と云ハ秋分ハありしものと
障ハ金の別と云ハ事ハ意恩院殿目録と云ハ事
ハありしものと云ハ秋分ハありしものと云ハ事
ハありしものと云ハ事ハありしものと云ハ事

百五初焼ハと云ハ中ちん之云初焼ハ初焼と云ハ中ちんハ
挑灯ハ源余年中初焼ハ中初焼ハ初焼と云ハ事
光原院殿之好まう清成記ハ中ちん之と云ハ挑灯
ハ中ちん之と云ハ事ハ中ちん之と云ハ挑灯ハ中ちん
ハ中ちん之と云ハ事ハ中ちん之と云ハ挑灯ハ中ちん

百五初ハ中ちん之と云ハ事ハ中ちん之と云ハ挑灯ハ中ちん
云ハ中ちん之と云ハ事ハ中ちん之と云ハ挑灯ハ中ちん

百五 雲梯後のうへひ云先年伊豆尾府地下の友人持衣の
常服冠成衣ししころとしるハ持衣のくハけし胸腹の袍
のく色し常服ししころとせしハ持衣のく胸腹の袍ハ四柱
以下の着衣ともかき合ふ常服の日用の中云脚のくて衣
友としも胸腹成衣のけつたよめつてハ文彦武彦成
論せず胸腹成衣のけつと壺井美智の装束要領抄
のくししり物ハかの秋女くみし地下の友人持衣の常
服冠と成ししころと云ハ持衣のく胸腹の袍のく又
冠のくしし胸腹の袍ハ友の胸をけつて神として
て形持衣の神の似しころのくて云ハ装束の意式
のくししり秋女の装束の事ハ持衣のくししりしを

右秋女胸腹成衣のくのくさめハ詳し然秋女の世ハ名も
その者にして度々特後又たくひをくその着せし書とハ
古人のくつりし事とハ後めし昔よりりやあり事し事
と汝の心しり事多し英雄の士としり成されたハの
書き癖のりし世もくもくふひくしりや知ぬ事を知り
し顔をして社にし事をけりきりしし事とハの中心を
しりしりしりあせし事をけりしりし書とハの中心を
うまうじしき物もりり社人にしては胸のりし事ありし
されらの着せし書とハの中心をけりしし事とハの中心を
そのく我よりしりあはるる人々の秋女と云名山のくめて
何の事くしりしりたためるくむしりてりし事とハの中心を

よみゆく人しをりたぬしりれ

安永三年甲午四月廿六日 平貞丈書

わんくけしハ茶葉のまうくくさし全也

南唐遺稿評

一卷二和歌の余不用りし文卷の事一是ハ和歌ふかき至
たうわつてハふし 古来書物と云せく 讀卷にわらふ
寸法あるものくを平礼抄のま直法所文卷少て書成
議せしとより 今の文卷と云わハ 後世の傳さして志
たて たうわつてハふしにハあるものくそれハ信友
成見卷と云名の信あるを 傳ひて 例ルと名付けられ
唐古の書ハ 斜ルシヤキと云名の事とのせしるもあり
見卷のヤハハはまうくもの事お記系ハ見卷と
おゆしきもの事ハふし 我ハ古来文卷と
まうくせしと云ふし 傳成お記系ハ例卷